



ISSN 0385-0838

第 162 号

発行所

亜細亜大学アジア研究所

東京都武蔵野市境 5-24-10

電話 0422 (54) 3111

郵便番号 180-8629

エリゼ・ルクリュ 『新世界地理―地球と人間』について

柴田 匡 平

フランスの地理学者エリゼ・ルクリュ（一八三〇―一九〇五）はアナキズム思想家としても著名で、多くの著作を遺しましたが、代表作とされるのは、一八七五年から一八九四年にかけてパリ・アシェット社が刊行した一九冊の『新世界地理―地球と人間』です。合計一万七〇〇頁弱（平均九〇〇頁弱）の長大な著作で、独筆の世界地誌としては、その後に類を見ない分量と思われます。ほぼ年一冊のペースで刊行されましたが、タイプライターが実用化される以前のことです。恐るべき健筆と言つてよいでしょう。第一六巻『アメリカ合衆国』（次回配本予定）の原著あとがきを見ますと、毎週校正刷りが届いていたようでもあり、だとすると、まったくの書き下ろしだったかもしれません。版

元アシェット社に原稿が残っているなら、いつか実見できればと思っております。

文章は平明寛濶なもので、読み飽きるということがなく、ルクリュ研究者でいらつしやる野澤秀樹九州大学名誉教授が「水の流れのごとく、小気味よい感覚で読み進むことができる」（『エリゼ・ルクリュの地理学体系とその思想』地理学評論 59 (Ser.A) II, p.641-2）と評されたのは至当だと思います。とりわけ見事なのが地形の記述で、河川の流路や海岸線、山系の描写は簡にして要を尽くし、かつヴィヴィッドでありまして、さすが近代地理学の祖のひとり、カール・リッター門下（短期間だったようですが）と感じます。地図は木版で、地形図はいわゆるケバ図です（図版 1、『東アジア』二九頁図四の原図）。原

目次

- エリゼ・ルクリュ
『新世界地理―地球と人間』について
……………柴田 匡 平……………(1)
- フィリピン最高裁が比米防衛協定を合憲に
……………野沢 勝美……………(4)
- 書評論文 M・ビルズベリー『China 2019』
―米中関係の行方を探るための有益な示唆―
……………友田 錫……………(6)
- 〈書評〉エリゼ・ルクリュ著・柴田匡平訳
『東アジア（清帝国・朝鮮・日本）
―ルクリュの一九世紀世界地理』
……………青山 治世……………(8)
- 韓国の産経新聞名誉毀損事件と情報通信網法
……………田中 俊光……………(10)
- 『アジアの窓』ブリヤート族の「一村一品」
……………西澤 正樹……………(12)



図版 1

著第一巻『南ヨーロッパ』（未刊）のみはグリニッチ子午線からの経度を用いていますが、それ以後はパリ子午線とグリニッチ子午線からの経度

を上下に示しており、興味深い点です。当時のフランス人読者の便、ないし愛国心を考慮したのかもしれませんが。また図の下に基準距離を線で示すのは、縮尺の活字が不鮮明な場合（しばしばみられます）に読者の助けになります。地

形図が主で、主題図も混じりますが、多い巻だと二〇〇点以上、少ない場合でも一〇〇点を超え、全巻で三四〇〇点弱、平均一八〇点に達します。第二巻『フランス』（未刊）までは色々な製図師が担当したようですが、それ以後はスイス人製図師シャルル・ペロン（彼もアナキストでした）の手になるものが大半を占めます。ほぼ毎年刊行したのですから、単純には二日で一枚の版下を作成した勘定になります。元図の選定、縮小と作図、そして版刻という手順を考えれば、よほど効率的な製作システムなしには不可能だったでしょう。

都市図などには大縮尺、すなわちあまり縮小していない図があり、大型の世界地図帳でも地名のすべてを参照するのは無理とされます。幸い今日のインターネットでは衛星画像を自在な縮尺のもと閲覧できますので、当時と比較するとすこぶる興味深く、時の経つのを忘れて見入ってしまします。なお、欧文名称に「Plan」を付加して画像検索を行なうと、各地の色々な時期の地図を索出できます。たとえば北アフリカ方面では、フランス植民地時代の地図のほか、第二次大戦中に米軍が作

成した地図が見出され、徹底した情報収集能力が窺われるとともに、ルクリュ当時とあまり変わらぬ街路だったことも知られます。

カラー地図は各巻に数枚が綴じ込まれています。寸法と縮尺はさまざまで、大きな折り込み地図もありますが、惜しいことに年月を経て劣化し、変色や褪色が著しい場合もあるため、拙訳では原寸再録をあきらめ、巻頭のカラー図版に縮小して紹介するにとどめました。該当巻が対象とする地方全国は作成が間に合わなかったときもあるらしく、次巻に掲載する例もみられます。同様に、後半の巻では時に節立てが省略、あるいは欠落するように見えるものがあり、版組みに時間の余裕が少なかったかもしれません。しかし千頁内外の大著がさしたる破綻もなく、兎にも角にもめでたくまとめられているのは、百科全書派を生んだお国柄とはいえ、やはりルクリュの筆力の賜物でしょう。

挿画も木版で、各巻平均七五葉（合計一四三五葉）が収められています。題材は景観や往古の記念建造物、そして民族衣装を着用した典型像などです。写真製版が可能になる直前にかけてのもので、精粗に差がありますが、非常に細密な作品もあり、フランス木版画のひとつの頂点を示しているように思われます（図版 2、ビスクラの解放奴隷の女性、『北アフリカ 2』五四二頁挿画 11）。大半は頁大（ほぼ A4 サイズ）の寸法で、裏白になっており、版画をそのまま綴じ込んでいます。インターネットで検



LIBRAIRIE — DÉLIBRÉE AFFRANCHE.
Gouverneur de l'Algérie, d'après une photographie de M. Sarrailh.

図版 2

索すると、同じ絵柄の版画が単体でオークションに掛けられている例があり、原著から切り離し、彩色などを施して額装したらしく思われます。風景にくらべ、ヨーロッパを扱う第五巻までは人物像がやや類型的で、小説の挿絵のように見えますが、それ以後は迫真性を帯び、「映像の世紀」を予感させる水準に達しています。

挿画の原図は現地での写生画だったり、写真だったりとはさまざまです。原著第七巻『東アジア』ではイギリスの写真家ジョン・トムソンが清国で撮影した写真や、日本の章では幕末から明治初期にかけて横浜で写真館を営んだフェリーチェ・ベアトのものが多用されています。第八巻『インドおよびインドシナ』（次々回配本予定）では、現在もコルカタで営業する最古の写真館ボーン&シェファードの写真がしばしば登場します。ただし、もとの写真の正確な複写とは限らず、人物や事物の配置に多少の変改が加えられている例が見受けられます。図版 3



図版 3

は第七巻に「東海道の眺め」の題で収められています。また、もともとなつたと思われるベアトの写真「生麦事件の現場」として幕末史に著名な画像で、人物と挟み箱の位置が異なります。こうした加工のあとを見出すのも、本シリーズのひとつの楽しみ方かもしれません。

各章の構成はほぼ一様で、定型としては対象地域（国）を総説したのち、自然、住民、都市と集落、物産、行政の順に記述し、最後に行政区分と人口統計を示します。自然はまず山系、ついで水系、気候、植物相、動物相を叙述します。住民の記述順はルクリュ独特で、少数民族への言及が支配的な住民集団に先立つだけでなく、ほぼ例外なく、より充実しています。ひとつの

理由は、虐げられた境遇の人々が、しばしば征服された先住民の末裔であるからかもしれません。差別的な民族名を用いざるを得ない際にも、支配的な住民集団による蔑称であることに必ず言及しており、フランス人の麗質を感じさせます。都市と集落に関する箇所では、流域別（水系別）に記述するのが特徴的と思われます。

ひとつには、当時の物流にまだ水運が大きな比重を占めていたこと、また農業地域としてのまとまりも水系が基本軸であることが理由と思われるが、もうひとつには、流域に分けて地表面を抜け漏れなくカバーするという着想があつたかもしれません。

地名は現呼称と異なるばあいが見られます。「金沢」が Kanazawa と、ヨーロッパ風の訛音になつていたり、英独の旅作家が音写したものをフランス語の綴字法に書き換えてあるなど、古書ゆえの特徴ですが、一九六〇年代以降に国名になつた地名が用いられることも多く、訳出には注意が必要と感ずります。例としてはリビュア（エジプト以西の北アフリカ古称）、マウレタニア（ほぼ現マグリブ）、スーダン（ブラックアフリカ地域、いわゆる歴史的スーダン）、東インド（ほぼバキスタンからジャワ島）などです。

ルクリュの人となりや人生については、石川三四郎『アナキスト地人論―エリゼ・ルクリュの思想と生涯』書肆心水、二〇一三年、があるほか、野澤秀樹名誉教授による思想研究のご業績があります。気難しい人物ではなかつたよう



図版 4

で、同時代人ジュール・ヴェルヌの小説『グラント船長と子供たち』に登場する地理学者バガネルが彼をモデルにしたとも言われます。質素な暮らしぶりと伝えられ、遺影（図版 4）を見ても暖衣飽食とはほど遠く、どこか庭師かといった風情ですが、小柄ながら眼光は炯々たるもので、気力の横溢が窺われます。

振り返れば過去は確定した一本道ですが、それぞれの時点では常にあらゆる不確実性と可能性のもとにあつたはずで、一四〇〇―二〇年前の世界を統一的な視点と手法で記述したルクリュの『新世界地理』は、当時から現在に至る世界各地の空間的、社会的変化がどの程度まで必然的、ないし不可避だったのか、あらためて考えさせてくれる巨細なスナップショットなのかもしれません。それはまた、「地球と人間」のみならず、諸国民や民族の関係における将来の蓋然性を見通し、指針を構想する際にも、有用な作業のように思われます。

（信州大学学術研究院社会科学系教授）